

研究の背景および目的

構成主義学習理論とは、従来の知識習得型の学習から、知識生産型の学習への転換をめざす新しい学習理論です。生徒が自ら考え発見することで、知識を生産し主体的に学習を進める。これは学習理論としては新しいけれども、考え方（思想）としては長い伝統があります。そうした思想的背景を検討しながら、「学ぶ」とはどういうことか、「わかる」とはどういうことか、そして「教える」とはどういうことかという教育の根本問題を考究し、教育現場での実践に協力していきます。

■ おもな研究内容

1. いまなぜ構成主義なのか？

構成主義学習理論はいまや世界の潮流です。EU諸国をはじめ、中国、韓国、シンガポールといった成長するアジア諸国も必死でこの流れに乗ろうとしています。「生きる力をはぐくむ」というわが国の**新学習指導要領**（平成20年改訂）もその一例と言えます。キーワードは「**知識基盤社会**」です。各国の動向をさぐり、いまなぜ構成主義なのか、時代の要請を明らかにします。

2. 構成主義学習理論の思想的系譜

構成主義学習理論が注目されたのは最近ですが、実は**ソクラテス**の問答法以来の長い思想的な伝統をもっています。**ルソー**の「消極教育」も、**ヘルバルト派**の「単元学習」も、**デューイ**の「問題解決学習」も、**ブルナー**の「発見学習」も構成主義学習理論に含まれます。かつて教師主導の教授学を正当化するものだった**ヴィゴツキー**というソビエト心理学者の理論は、最近になって学習者主体の知識生産理論を正当化する構成主義学習理論として復活しました。同じ人の同じ理論がなぜ180度違う解釈を生むのか。解釈する視点が変わったのです。構成主義という眼で見ると、これまでのさまざまな教育思想の流派を一本の筋でつなげることができます。構成主義によって「**教育を技術ではなく、理論で語る**」ことが可能になりました。



ヴィゴツキー

3. 日本の教師の実践に学ぶ

優れた教師といわれる人の実践は、本人は意識していなくても、構成主義の考え方を取り入れています。多くの実践例の中から、構成主義の考え方に通じる要素を引き出し、それを**新しい授業創造**につなげます。

期待される効果・応用分野

子どもたちがグループ学習により、能動的に知識を発見して行く構成主義学習は、すでに多くの学校で実践されています。生徒に当事者意識を持たせて議論をリードする教師には、知識へのより深い理解と「省察力」が必要です。方法・技術中心の教育実践に不満を感じている人、教育実践に確かな理論を求めている人、教師の仕事はもっと自由に創造的なものだとして期待している人、そういう先生方をサポートする研究を目指しています。保護者の方の子どもへの接し方にも応用が可能です。

■ アピールポイント



● 拙著『デューイ実験学校と教師教育の展開』学術出版会（2010年）

本書では、ジョン・デューイのシカゴ大学実験学校の実践を、知識生産型カリキュラム開発の先駆的な実験として描き出しました。

🗨️ コーディネーターから一言

教育の世界的潮流である構成主義学習を研究。知識基盤社会が要請する教育の在り方を、理論と実践から追求しています。創造的な授業実践に取り組みたい先生方やPTAの勉強会やセミナー等へのご協力は惜しみません。

研究分野

教育哲学、教育思想

キーワード

構成主義、知識の構造、学びの共同体、ことばと思考、教えない教育